静岡大学
地域創造学環
SCHOOL OF REGIONAL DEVELOPMENT

文部科学省 地(知)の拠点

大学を飛び出し、
地域の皆様と連携し
学んできた成果を
ご報告いたします。

2018年度 静岡大学 地域創造学環

フィールドワーク 報告書

デザイン：
静岡大学 地域創造学環アート & マネジメントコース　柚木真里奈

第３回地域創造学環フィールドワーク報告会にあたって

平成28年度に開設した地域創造学環の歩みは、学生たちに学びの場を提供していただくフィールドの皆さまとの連携と協働の歴史です。行政をはじめ、地域の皆さまには大変お世話になりました。深く御礼申し上げます。

今年で第３回となるフィールドワーク報告会では、昨年度にフィールドが増えたこともあり、静岡県内15箇所、17テーマでの活動報告をいたします。また、昨年は１年生から３年生までがフィールドにフルエントリーした最初の年度でもあります。１学年のみで開始した手探りの状態に順次後輩が加わり、少しずつ、自分たちのキャパシティに応じた取り組みがなされてきました。拡がった活動とそれに対する評価・修正なども着実に行われるようになってきています。果たして地域で求められているニーズとのマッチングが果たされているでしょうか。ぜひご覧いただけるようお願いいたします。

フィールドワークの実践はまた、学環が目指す「コミュニケーション能力育成」の場でもあります。問題解決だけでなく、そのプロセスに地域の方々との十分な相互理解と建設的な検討がなされていたかが重要なポイントです。交流・連携・協働から生まれる多視点の獲得は、大学内だけでは提供できない貴重な経験になっています。まだまだ未熟な点も目につくかと思いますが、関係の皆さまから忌憚のないご意見、アドバイスをいただければ幸いです。蛇足ながら、フィールドで鍛えられるのは学生ばかりではありません。同様に引率の教員もまた成長していることを申し添えます。「地図は現地ではない」という指摘がありますが、自身のフィルターで世界を認識しがちな教員にとって、地域の方々の声は、課題の大きさや自らの関わり方を気づかせる機会になっています。

皆さまには引き続き学生たちの歩みを温かく見守りつつ、ご指導くださいますよう、心からお願い申し上げます。なお、学環のホームページ上（http://www.srd.shizuoka.ac.jp/）でフィールドワークの様子を公開しており、順次更新していく予定です。こちらもご覧いただければ幸いです。

2019年５月30日

国立大学法人静岡大学
地域創造学環長
江口　昌克

目　　次

地域創造学環とは／フィールドワークの取り組み …… 2

地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ …… 3

2018年度フィールドワーク報告

静岡市　清水港周辺地域 …… 4

静岡市　庵原地区 …… 6

静岡市　東静岡駅前 …… 8

静岡市　駒形通四丁目商店街 …… 10

静岡市　浅間通り商店街 …… 12

焼津市　浜通り …… 14

浜松市　浜松文芸館（公益財団法人　浜松市文化振興財団）…… 16

浜松市　佐久間町 …… 18

田園空間博物館　南遠州とうもんの里 …… 20

御前崎市 …… 22

松崎町　商店街 …… 24

松崎町　観光と防災 …… 26

東伊豆町 …… 28

伊豆半島ジオパーク（保全と防災）…… 30

伊豆半島ジオパーク（教育）…… 32

県営団地 …… 34

学内地域連携拠点 …… 36

地域とのかかわりや実践を通じて得た学び、自らが成長できたこと …… 38

地域創造学環とは

静岡大学地域創造学環とは、平成28年4月にスタートした従来の学部の枠組みを越えた新しい全学学士課程横断型教育プログラムです。静岡大学のすべての学部（人文社会科学部、教育学部、情報学部、理学部、工学部、農学部）の授業を履修することができます。幅広い教養と高い専門知識を身につけながら、積極的に地域（フィールド）に飛び出し、より魅力的な地域社会の創造に取り組むことができる人材を育成します。

フィールドワークの取り組み

現在15テーマで、地域の方々と交流しながら地域の課題や資源を発見・探求し、課題解決のための提案や実践を行っています。

地域創造学環のフィールドワークの特徴

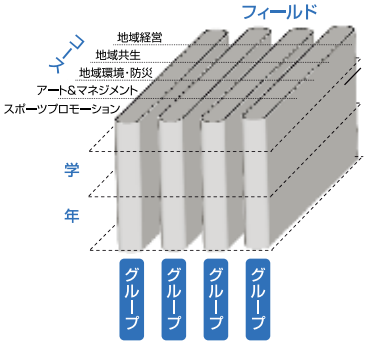
① 地域に密着した体制により、地域の実情と課題に正面から対峙
② 5コースを融合したチームを編成し、異分野が結束して取組む
③ 縦の繋がりを重視し1年次から3年次をひとつのチームとする
④ 単年度ではなく、中長期的に地域と関わり、信頼関係を醸成

フィールドワークの年次別到達点設定

フィールドワークは単年度完結ではなく、数年間にわたり地域及び関係者と連携しながら課題解決に取り組みます。

コース融合のチーム編成

コース、入学年という枠にこだわらないグループ編成でフィールドワークを行っています。



地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ

静岡市

清水港周辺地域
浜田・清水地区の情報発信とおもてなしによる交流・活動人口の増加

東静岡駅前
アートとスポーツによるにぎわい創出

浅間通り商店街
浅間通り商店街のにぎわい創出

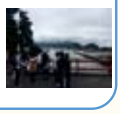
庵原地区
地域資源を活かしたスポーツと食による「健康長寿のまちづくり」

駒形通四丁目商店街
駒形通四丁目商店街のにぎわい創出

県営団地
県営住宅団地における居場所づくりと地域福祉資源のネットワーキング

焼津市

焼津市浜通り
地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動



学内地域連携拠点
（静岡大学静岡キャンパス）
静大発　地域と大学の連携を広めよう！

伊豆半島ジオパーク（保全と防災）
伊豆半島ジオパークにおける環境保全と防災対策

伊豆半島ジオパーク(教育)
伊豆半島ジオパークの持続可能な開発と教育(SDGs／ESD)の推進

東伊豆町
新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト

浜松市

浜松文芸館
公益財団法人浜松市文化振興財団
若者の文芸離れを食い止めよう

佐久間町
商品開発で交流の環づくり

掛川市

田園空間博物館 南遠州とうもんの里
子どもを呼び込むための環境づくり

松崎町(商店街)
なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出

松崎町(観光と防災)
防災と観光の両立

御前崎市

御前崎市
御前崎スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～

静岡市　清水港周辺地域

浜田・清水地区の情報発信とおもてなしによる交流・活動人口の増加

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　３年　影山舞、本田圭美
（地域共生）　３年　杉山莉奈
（地域環境・防災）３年　梅田和典
（アート&マネジメント）２年　樋口加奈、１年　玉木絢女
（スポーツプロモーション）３年　岩崎彩音、坂井宏輔、藤川智奈美、２年　沼田浩範、野村圭生、溝上敬佑、１年　上田七珠、長谷川恭平
指導教員：○准教授　石川宏之、教授　岩田孝仁　※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
静岡市清水区地域総務課
清水地区連合自治会
浜田地区連合自治会

地域概要

清水港周辺には、新鮮な魚を食べることができる清水魚市場「河岸の市」や、港に隣接した複合商業施設「エスパルスドリームプラザ」などの港を有効活用した施設がある。また、その清水港の歴史について学ぶことができる「フェルケール博物館」や、様々な催事に対応することができる「静岡市清水文化会館マリナート」など、魅力的な資源が多く存在する地域である。

その他にも、清水港に所縁のある清水次郎長の生家や清水港船宿記念館「末廣」などの観光名所が点在しており、さらに美しい富士山が観望できるなど、観光としての資源も多く存在している。近年では、外国客船の寄港が増加しており、外国人観光客が多く訪れるようになった。しかし、清水区の人口は少しずつ減少しつつある。

写真１：「平成最後の秋まつり」の様子

課　題

写真２：作成した冊子の表紙（浜田地区）

写真３：作成した冊子の表紙（清水地区）

①清水港線跡自転車歩行者道の利活用
今年度のフィールドワークでは、イベントとしてフォトラリーを行なった際に清水港線跡自転車歩行者道を活用した。今回のイベントのように、整備された歩行者道を今後どのように活用するかということを考える必要があるだろう。

②外国人観光客の増加に対する対応
近年清水港には多くの客船が寄港するようになったが、様々な言語を話すことができるスタッフがいないことや、外国語表記の看板などの設置が間に合っていない。それが原因で、文化の違いによるマナーの問題や、外国人観光客の不満の声があるなどという問題が起きてしまっている。また、日本の文化について知りたくても知ることができないという問題もある。そのため、外国人観光客が街を歩きやすい環境を作ることが必要だろう。

③商店街の衰退
今年度のフィールドワークでは、主に、次郎長通り商店街、清水港町商店街と関わる機会があった。実際に商店街に訪れたり、インタビュー調査を行なったりして、利用者や若者が減少している様子が見られた。このことを含めた商店街の衰退ということも課題の一つと言えるだろう。

今年度取り組んだことと成果

①「平成最後の秋まつり」
静岡市清水文化会館マリナートと清水テルサの間に位置する清水駅東口駐車場前のスペースを活用できないかと話し合い、「平成最後の秋まつり」を開催することとなった。本イベントではチャレンジコーナー、体験コーナー、アートコーナー、フォトラリーなどの複数の企画を各ブースで行った。当日学生は運営スタッフとしてイベントに参加した。当日は外国人観光客の方を含め多くの人に参加していただけた。

写真４：次郎長通り商店街の様子

②浜田地区・清水地区冊子作成
浜田地区連合自治会、清水地区連合自治会の方々と一緒に浜田地区・清水地区の紹介冊子を作成、掲載するコンテンツ、ページレイアウトについて話し合いを重ねた。完成した冊子は、今後両地区を知らない人たちへのPRとなることが期待される。

③次郎長通り商店街の活性化に向けた提案
「次郎長通り商店街の活性化に向け第一歩として何をするべきか」をテーマとして話し合い、商店街の将来像へのニーズを知るため商店街周辺の住民と商店街の店主を対象にアンケート調査を行った。その結果をもとに、学生が各々次郎長通りの活性化に向けた取り組みを考え、関係者に向け提案・発表をした。

④外国人旅行客用ポップの制作（継続）
平成29年度ポップを制作させていただいた店舗に、その後の聞き取り調査を行った。平成30年度には追加のポップ制作と新たに希望のあった店舗のポップ制作を行った。

写真５：ポップ制作のための聞き取り調査の様子

今後取り組むべきこと

・平成30年度浜田地区・清水地区の冊子を作成、前年度に引き続き外国人旅行客用ポップの制作。
→制作した冊子やポップの継続的な利用状況の確認。

・イベント内企画での「清水港線跡自転車歩行者道」の利活用。
→引き続き清水港線跡自転車歩行者道の活用方法の模索。

・「外国人旅行客の増加に対する対応」が課題ということで、対応者である店舗側のニーズに応えポップ制作等の活動を行ってきた。
→利用者である外国人旅行客側の意見を知ることの必要性。

・「商店街の衰退」という課題に対し、継続的に次郎長通り商店街にてフィールドワークを行い提案を投じた。
→継続的な関りの中で築いてきた関係性を維持し、新たな関係作りと連携を目指す。

・清水港周辺地域フィールドでは二年間３つの課題に取り組んできた。
→課題の見直しと新たな課題への挑戦。

静岡市　庵原地区

地域資源を活かしたスポーツと食による「健康長寿のまちづくり」

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　３年　和泉直人
（アート&マネジメント）２年　矢勢才華、１年　岸山莉子
（スポーツプロモーション）３年　加藤鉄平、岸野泰知、塩崎陽也、水野大貴
２年　大城ひいろ、山下宇光、山梨空良
１年　植松舞、木村心香、竹端勇人
指導教員：○講師　村田真一、准教授　杉山卓也、特任助教　川崎和也
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
静岡市清水区地域総務課
庵原地区連合自治会
公益財団法人静岡市まちづくり公社

地域概要

庵原は、静岡県中部、静岡市清水北部の庵原山地にあり、人口約１万人、総世帯数約３千世帯の土地である。特産物は主にお茶とみかんであり、多くのみかん畑と茶畑が広がっている。また、清水ナショナルトレーニングセンター（以下トレセンとする。）や庵原球場などスポーツ施設が充実している。ここ数年、プロサッカーチームであるヴァンフォーレ甲府がトレーニングキャンプとしてトレセンを利用している。このように庵原という地域は“食”と“スポーツ”が主なウリである。

現在、庵原では、その土地にあるものを活かした健康長寿のまちづくりを目指しており、健康づくりのイベントを開催している。人口減少が課題であるが、地域の取り組みには地域住民自らが積極的に参加する、心温まる生き生きとした地域である。

庵原地区のまち並み

課　題

庵原地区だけではないが、静岡市全体で人口流出、高齢化が問題になっている。この問題を解決するために、魅力あるまちづくり、アクティブな高齢者を増やすためのいきがいづくりが必要である。庵原地区には、多種多様なスポーツで利用される清水ナショナルトレーニングセンターや庵原球場がある。これらの施設は、学生、Ｊリーグのトレーニングキャンプやプロ野球選手の自主トレで活用されているが、高齢者を対象として活用されることが少ない。また、お茶やみかんを中心に多彩な農産物が栽培される農業地帯でもあるがこれらを使った名物も存在していない。このように庵原地区は地域資源を有しているにも関わらず、それらを地域活性化のために最大限活用しきれていないように思われる。また、それら資源の情報発信が少ないことも課題として挙げられる。

清水ナショナルトレーニングセンター

スポーツ班

今年度取り組んだことの成果

スポーツ班

スポーツ班では、トレセンの課題を発見し具体的な活動を決定するために、職員の方々から複数回にわたりお話を伺った。現在のトレセンの事業は、活動としてプロの方々のクリニック、グランドゴルフ、散策イベント、婚活、クリスマスイベントなどであった。そして課題として、トレセンのイメージとして、プロしか使えないことや一般利用が少ないこと、広報が足りていないこと等が挙げられた。

これらのことから、次年度に向けて庵原の住民にアンケートを実施することにした。内容は、現在のスポーツ実施状況やトレセンの利用の有無、どのようなイベントがあったら参加したいと思うかなどのニーズ項目を検討した。また、アンケート作成においては、関係者方の意見やアドバイスを基に、現実課題に沿ったものとし、既にある先行スポーツ実施調査の項目などを参考にしながら全員で取り組んだ。

食班

食班では、まず庵原のまちについて知るため、庵原の特産品を販売しているお店の方へのインタビュー調査と、庵原生涯学習交流館での庵原の歴史調査等を行なった。庵原の特産品は主にみかんとお茶であり、まちの人のための販売はもちろん、アンテナショップではギフト用としての商品も充実しており、遠方から買いに来られる方もいると伺った。

また、実際にトレセン周辺の庵原のまちを、Googleマップの地図を片手に歩いた。みかん畑や無人直売所などの位置を細かく書き込み、自分たちオリジナルのマップを作るためのデータを収集した。多くの無人直売所があることや、庵原ならではのお店があることなど、歩いてみないと分からないことばかりであった。

アート＆マネジメントの学生が作成した、
「J-STEPマルシェ2019」で使用した看板

「J-STEPマルシェ2019」の様子

庵原地区のまちあるきの様子

今後取り組むべきこと

スポーツ班

今後の取り組みとしては、スポーツ実施状況に関するアンケートを庵原の住民に配布し、回答していただく予定である。そこからスポーツ実施状況や、どんな取り組みがあればスポーツを実施するのかなどを把握し、トレセンを通じて取り組んでいきたいと考えている。そして、トレセンの利用者を増やすこと、スポーツ実施者の増加を目標に、スポーツの良さを発信していく中で、それが地域の盛り上がりにどのように繋がるかのプロセスをアクション・リサーチしたいと思う。

食班

上記の活動を踏まえ、まずは庵原のまちと私たちの距離を近づけることが大切だと感じた。そのため、今後の取り組みとしては、実際に庵原のまちを歩くことで、本当の庵原の良さを自分たちが知り、その経験を広めるための活動に繋げていきたいと考えている。具体的には、集めた情報を基にオリジナルのマップを作成し、それを生かして庵原の良さを広める企画を考える予定である。

静岡市　東静岡駅前

アートとスポーツによるにぎわい創出

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（アート&マネジメント）３年　伊藤純平、黒田亜沙未、白鳥日和子、鈴木夏帆、
唐坂梨紗子、萩原亜美、橋本直英、平田あかり
指導教員：○准教授　祝原豊、教授 白井嘉尚、教授　芳賀正之、
准教授　川原崎知洋、講師　名倉達了
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
静岡市観光交流文化局スポーツ振興課
静岡市観光交流文化局文化振興課
静岡市企画局企画課
株式会社H.L.N.A

地域概要

「東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ」は、2017年５月より東静岡駅北口前にオープンした国内最大級のローラーパークがあるスケートパーク、アート作品が設置された居心地良い芝生エリアおよび駐車場兼イベントスペースの３つのエリアからなる施設である。「文化とスポーツの殿堂」の形成を目標としたまちづくりの一環として、広い世代が気軽に参加できる各種イベント・体験会をこれまでに開催してきた。
　あと数年は今の形での土地利用での活性化を図っていく方針となっている。

「東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ」ガイドマップ

課　題

①　文化芸術・アートに触れるイベントは一過性であること
　スケートパークでは、各種ローラースポーツのスクール・イベントを常在職員指導のもと開催している。また、芝生エリアでは「めぐるりアート」作品の展示会場としての利用や、文化スポーツ融合型イベントの開催も定期的に行われているが、アート系イベントは体験・見学機会の比重で考えると、やや少数の割合である。しかし、年々常時展示作品が増加しつつあるので、それらと結びつけたイベントに活用する方法があるのではと考えられる。
　最後に行ったニュースポーツイベントでは地域の子供たちや年配の方を中心に多くの地域住民に来場していただいた。

２年次　フライングディスクイベントにて

②　ヒロバの認知度・イメージの向上
　認知度に関してはある程度ヒロバの存在を認知していただいていると考えられる。しかしイメージに関しては①で述べたようにどちらかというとスポーツ色が強いのではないだろうか。よりアートとスポーツ両者が共存しているような形を目指していかなければならない。また、イベントで告知をする際、「アート＆スポーツ／ヒロバ」ではなく「東静岡北口駅前広場」と掲載されがちである。ヒロバという名前で市内、県内の方々に浸透させていく必要もある。

③　イベント期間外のヒロバの活用方法
　イベントでヒロバが使われていない期間、芝生の広がるスペースとなる。この時期にヒロバで遊べるようなスポーツ用品の貸し出しなどを行い、地域住民のヒロバの利用促進をしていくべきと考えられる。また、より気軽に地域住民もヒロバでイベントを起こすことができるような仕組み作りをしていくことも必要である。

１年次　ローラースポーツエリアイベント

今年度取り組んだことと成果

2018～2019年（３年次）活動内容		
①	6 / 3	東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ一周年記念イベント　参加＆補助
②	8 / 2	ヒロバ管理会社職員との会議
③	11/14	ディスコン大会説明会への出席
④	11/25	ディスコン大会への参加
⑤	2019/ 1 /21-28	ニュースポーツ体験会 広報用チラシ・配布シール作成
⑥	2019/ 3 /16	ニュースポーツ体験会「ニュースポーツだいしゅうごう!!! 楽しくカラダを動かそう!」参加

①　2018年６月３日にオープン１周年を迎えたことを記念して、ローラーパークと芝生ヒロバで各種イベントが行われた。学生メンバーによる過去のイベント紹介ブース・魅力的なヒロバを作るための意見交換の場を設け、「めぐるりアート」に参加作家による公開制作・ローラースポーツのコンテスト見学を行った。

①芝生エリアに設置された作品

②　ヒロバ管理会社である「H.L.N.A」職員と今後のヒロバの意向について話し合った。

③　2018年11月25日に行われる、静岡市スポーツ推進委員連絡協議会によるディスコン大会の関係者説明会が駿河区役所にて行われた。学生メンバーはオブザーバーとして出席し、ディスコンの説明や当日の打ち合わせ及び準備が行われた。

④ディスコン大会にて

④　静岡市北部体育館で幅広い世代に向けたディスコン大会を開催。学生メンバーも参加しながら老若男女問わず楽しめる大会であった。

⑤　静岡市スポーツ推進委員連絡協議会と連携しながら、2019年３月16日に行われるニュースポーツ大会に向けて、学生メンバーは広報用チラシ(裏表)、配布シールを作成。チラシはヒロバ近辺の地域や各地区の小学校などに配られた。

⑥作成したチラシ（両面）

⑥　ニュースポーツ体験会「ニュースポーツだいしゅうごう!!! 楽しくカラダを動かそう!」を企画・参画した。チラシの効果もあり子どもの姿が多く見られ、学生が作成したシールをスタンプラリーのような方式にすることで、８種類のニュースポーツの巡回を促す仕組みをつくった。また、静岡市スポーツ振興課スポーツ振興係のゆるキャラである、「チャレンジくん」を学生が務め、子どもたちの人気を得た。

⑥「チャレンジくん」イベントにて

今後取り組むべきこと

　昨年度で地域創造学環の学生による東静岡地区「東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ」でのフィールドワーク活動は終了した。そのため、他フィールドのように授業として学生がヒロバに関わっていくことは少ないだろう。今後は、ヒロバにおける行政や企業が主催するイベントへの積極的な参加やヒロバを使った個人的なイベントの開催などによって、個々でヒロバに関わっていくことが期待される。３年間ヒロバに関わり、そこから得た地域についての情報やイベント開催の知識をこのような場で発揮していければと考えている。
　また、ヒロバ自体も２～３年後になくなることが計画のひとつとしてある。そのため、ヒロバのみを使った“賑わいの創出”ではなく、周辺地域全体を通した“賑わいの創出”を考えていく必要があるだろう。

静岡市　駒形通四丁目商店街

駒形通四丁目商店街のにぎわい創出

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域共生）　１年　岡本敦、黒田千晴
（アート&マネジメント）３年　井口紗那、大澤七彩
２年　稲垣茉里
指導教員：〇准教授　井原麗奈、教授　伊藤文彦、准教授　髙橋智子
※〇はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
駒形通四丁目商店街のみなさん

地域概要

駒形通四丁目商店街は、静岡県静岡市葵区にある商店街である。多くの店舗の営業時間が9:00～18:00であり、商店街内にはトリコロールカラーのアーケードがある。休日の昼間であっても商店街内の人通りは少なく、集客の伸び悩みが大きな課題となっている。そのなかで、商店街の店舗間のつながりの薄さなど、商店街を活性化する上での様々な問題を抱えている。

駒形通四丁目商店街

課　題

現在、駒形通四丁目商店街は衰退化という課題を抱えている。この現象は全国の商店街でも見られている光景である。全国の商店街と比べてとりわけ駒形通四丁目が衰退しているわけではないが、解決していかなければいけない課題だろう。また、商店街の活性化は地域の安全を守るという役割を持つため、そのような意味でも商店街の活性化は必要である。

～学生が感じたこと～

- イベントを開いても商店街側とのかかわりが薄く、外部の人からは、ただ学生が商店街の場所を借りてイベントを行っているように見えてしまっている。
- 商店街側が行うことと学生が行うことのバランスを見直す必要がある。
- 多くの人が参加できるようにイベントの形を決めすぎないほうが良い。
- 路上駐車が多く、道幅が狭くなってしまっているため危険である。
- イベントに協力的なお店と非協力的なお店がある。

今年度取り組んだことと成果

～「駒形パシャらっち」の開催～

「駒形パシャらっち」とは参加者の方に商店街の中を散策してもらい商店街の中で写真を撮ってもらうというイベントだ。このイベントを行う目的は、イベントを通してより多くの人に商店街へ足を運んでもらうということ。また、商店街内の店舗間の繋がりを持ってもらうということの二つにある。今年度はこのイベントを計２回行った。１回目に行ったイベントではちょうどハロウィンシーズンとのこともあり、仮装してきてくれている方もいて１回目のイベントにしては成功していたように感じた。ただ１回目のイベントでは参加者のターゲットを絞ることができず商店街の外の人たちをあまり呼び込むことができなかった。こういった反省を生かして２回目のイベントを行った結果２回目は満足のいく結果で終わることができた。特にイベントの参加者を親子に絞ったことが効果的だった。参加者を親子に絞ったことによりたくさんの親子連れの方が来てくれた。学生がこういったイベントを行うことにより、商店街が華やかになりにぎわっているような感じがした。

●１回目と２回目の比較

	１回目【10月27日（土）】	２回目【３月２日（土）】
参加者数	13人	25人
対象	なし	主に親子
賞	参加賞、優秀作品賞	参加賞のみ
飾りつけ	なし	あり

第１回駒形パシャらっち

第２回駒形パシャらっち

●駒形パシャらっちの方法

今後取り組むべきこと

① 次に繋げられるような活動をしていくということ。前年度の活動を引き継いで行うだけではなく、前年度を超えられるような成果が出る活動を行っていきたい。

② お客さんのリサーチをするということ。このリサーチをすることによって我々学生がどれだけ商店街に貢献できているのかを測ることができる。こういった数字を使いながら今年度は活動を行っていきたい。

③ 商店街側がやることと学生がやることのバランスをしっかりと考えるということ。現在は商店街と合同のイベントではなく学生が商店街を借りて行っているイベントになってしまっているため、この商店街側がやることと学生がやることの線引きをするということは非常に重要である。もし、この線引きを行うことができたらきっと商店街と学生との合同のイベントを開くことができるだろう。今年度はこの３つの事柄を重視して今後フィールドワークを行っていきたいと考えている。

静岡市　浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　３年　水野なな子、２年　吉田慎太郎、１年　加藤秋沙、森智徳
（地域共生）　３年　佐藤恵美、西子幸裕、２年　青木佑未
（地域環境・防災）３年　服部智美
（アート&マネジメント）２年　佐野乃雪、長澤由奈、1年　今西真紀、田中真衣、前田春香
（スポーツプロモーション）２年　宮村勇希
指導教員：○教授　平岡義和、准教授　川原崎知洋
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
静岡浅間通り商店街振興組合

地域概要

はじめての街歩き（１年生を案内する）

静岡市中心部に位置する静岡浅間神社から、駿府城公園方面の中町交差点までを結ぶ、600メートルの「浅間通り」に存在する商店街。かつては、浅間神社の門前町、または駿府城下町として、静岡の産業、流通の中心地であったが、百貨店やコンビニの進出、通信販売の普及等による客の減少で20年ほど前から衰退が始まっている。平日の昼間でも人通りは少なく、シャッターが下りたままの店が目立つ。

しかし、毎年秋には静岡とタイの交流事業として、この地に生まれタイに渡って活躍した「山田長政」にちなんだ長政まつりが開催されており、多くの観光客が訪れる。また、毎月１日に浅間神社で行われている安倍の市にも、野菜やお菓子などを目当てに地元の方が集まり、賑わい創出の場となっている。

取り組んだことと成果

輪くぐりさん

事前に大学内で輪くぐりさんのチラシを配布し、来場を呼び掛けたが、効果はあまり得られなかった。当日は本部や各ブースの運営補助を担当した。

長政まつり

主に子ども向けの広場の運営を担当した。日本とタイの昔の遊びを中心に行い、多くの子どもたちと楽しむことができた。

１年生に向けた商店街紹介＋商店街の新たな魅力探し

12月には上級生が下級生に商店街を紹介し、２月には商店街の新たな魅力探しを行い、学生目線での商店街の魅力を見つけることができた。

駿河東海道おんぱく2019

御朱印ガール入門！パワースポット静岡浅間神社と界隈ぶら歩きツアーに参加し、浅間神社の詳しい歴史について学んだ。

河内屋さんのどら焼き（美味しかった！）

浅間神社にしじみが！
（浅間神社と界隈ぶら歩きツアー）

課　題

商店街の利用者の減少

商店街の前の道を通勤・通学等で通る人は多いが、店舗を利用する人が少ない。また、神社には大きな観光バスなどで大勢の人々が訪れるが、神社で参拝するのみで、商店街まで人が流れることが少ない。そのためいかにして商店街に来てもらい、足を止めてもらうかという工夫が必要であり、今後検討が求められる。

平日の浅間通り商店街

継続的な活動が少ない

今までのフィールドワークの活動は、商店街で行われる大きなイベントの運営補助が中心であり、単発の活動が多かった。そのため今後は、学生主導で複数の継続的な活動を行うためにグループ内で５つの班を作成し、より円滑に計画を進めていく。

今後取り組むべきこと

輪くぐりさん・長政まつり

輪くぐりさん・長政まつりなどの大きなイベントでの運営の補助を行う。

輪くぐりさんで賑わう浅間通り商店街

浅間神社に向かう絵馬奉納行列（長政まつり）

マップ作成

既存のマップとは異なり、学生目線での商店街の魅力を伝えるマップを作成することにより、新たな層の顧客を創出する。また、写真やイラスト、豆知識なども加えるなど、より見やすくなるような工夫を行う。

飾りつけ

全国各地の商店街を参考に、商店街のアーケードや大きな門など商店街の様々な場所に、七夕、ハロウィーン、クリスマスなどの季節に合った華やかな飾りつけを行う。また、飾りを作る子ども向けのワークショップなどの開催も検討中。

SNS

TwitterやInstagramなどのSNSを活用し、商店街の魅力を多くの人々に発信する。さらに、SNS映えスポットの設置などにより、自分たちで発信するだけでなく商店街に訪れた方々に情報を拡散してもらえるような仕組みづくりを行う。

焼津市　浜通り

地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　２年　藤田真由、矢ケ崎花音、１年　坂井朝陽、宮嶋洋仁
（地域共生）　３年　大橋彩香、杉山莉奈、袴田朋伽、宮澤大己、１年　山口桃花
（地域環境・防災）２年　大橋和真
（アート&マネジメント）３年　松永千里
（スポーツプロモーション）２年　種茂勇斗
指導教員：〇准教授　太田隆之、教授　橋本誠一
※〇はフィールド責任教員

ステークホルダー
焼津市総合政策部政策企画課
焼津市交流推進部観光交流課
NPO法人浜の会
静岡県立焼津水産高等学校
NPO法人わかもののまち

地域概要

↑浜通りの風景

浜通りは、駿河湾沿岸に沿った街道を中心に形成された、南北に１kmほど続く集落である。集落内には、かつて運河としても機能した堀川が北へと流れている。北浜通・城之腰・鰯ヶ島の３地区に分かれており、魚商人が築いてきた沿岸部特有の伝統的家屋や小路などの焼津の歴史と文化が豊富にある地域である。例として、明治時代に怪談小説で、名の知れた小泉八雲が滞在し、多くの作品をこの地に残した。また、歴史的資源だけではなく、地区ごとの夏祭りや「あかり展」などの伝統的な行事が多く存在しているが、人口減少や少子高齢化の影響から、参加者が減少傾向となっており、存続が危惧されている。

浜通りの町並みの保存や活性化を目指し、平成28年に浜通り活性化フォーラムが組織され、活動が行われている。

取り組んだこと

↑あかり展で作成した行灯

あかり展への参加

「あかり展」へ参加した。今年もまた、地域創造学環の行灯を作成した。来場者へのアンケート調査を行った。今年は新たに、焼津市に100点満点で点数をつけ、いい点・悪い点を考えてもらう質問を追加した。

若者ぷらっとホームやいばるにて聞き取り

NPO法人わかもののまちに所属する土肥潤也さんに、若者主体のまちづくりに関する活動について伺った。

焼津水産高校流通情報科３年生との交流

2018年５月と2019年１月にワークショップを行った。

うみえ～る焼津でのアンケート調査

焼津水産高校流通情報科３年生による模擬会社「魚国本番」（場所:うみえ～る焼津）にて来場者に、高校生による地域活性化の取り組みに関するアンケート調査を行った。

成　果

↑焼津水産高校にてワークショップを行う様子

↑うみえ～る焼津にて、アンケート調査を行う様子

あかり展でのアンケート調査

アンケートの結果、焼津市に対する満足度は、焼津市内での満足度は高いのに対し、市外の人はあまり高くないという傾向を捉えることができた。焼津市に住んでいる人は現状に満足していることが考えられる。

焼津水産高校で行ったワークショップ

以下のテーマで同校流通情報科３年生とワークショップを行った。

１回目　・焼津に住み続けたいか・戻ってきたいか
　　・焼津のいいところ・悪いところ
２回目　・魚国の意義とは？
　　・若者が町を出て行くことに対してどう思うか

これらのワークショップを通じて、高校生の考えを直に聞くことができた。しかし、２回目は高校生にとって馴染みのないテーマであったようだ。

うみえ～る焼津でのアンケート調査

あかり展で行ったアンケート内容を基にしたアンケート調査を行った。焼津水産高校が行う地域活性化の取り組みを高く評価する声が多かった。また、情報収集手段としてツイッター、インスタグラムはまだ浸透していないことがわかった。

課題＆今後取り組むべきこと

浜通り活性化への取り組みが弱い

浜通りにある服部家（空き家）保存活用計画が完成したが、そこから何も進んでいないのが現状である。大学生の立場からどう関わることができるのか検討していきたい。

高校生にとって焼津は「残りたい」と思える場所ではない

ワークショップを通じて得た高校生の意見を、ステークホルダーをはじめとしたまちづくりに携わる人々に伝えていく必要がある。

市内でまちづくり活動を行う団体を調査する

市民の方が中心のまちづくり団体を調査することで、焼津や浜通りに対する視野を広げることができる。様々な団体を調査していきたい。

焼津市浜通りフィールドの今後

あかり展・うみえ～る焼津でのアンケート調査や、焼津水産高校の生徒とのワークショップなど、意見を聞くことが中心の活動となっていたが、今後はその意見を踏まえた活動の展開を図る必要がある。

浜松市　浜松文芸館（公益財団法人　浜松市文化振興財団）

若者の文芸離れを食い止めよう

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　３年　大石清香、望月涼介、１年　尾本優里香
（地域共生）　１年　齋藤紫苑
（地域環境・防災）２年　伊藤悠希
（アート&マネジメント）３年　松永千里、２年　古川綾乃
指導教員：○教授　袴田光康、准教授　井原麗奈
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
公益財団法人浜松市文化振興財団浜松文芸館

地域・施設概要

浜松文芸館は、公益財団法人浜松市文化振興財団が管理している施設です。平成27年４月よりクリエート浜松内の４階及び５階フロアの一部に移転・リニューアルオープンしました。そんな浜松文芸館では、郷土の生んだ優れた文芸作家の業績を次代に引き継ぎ、市民文化の向上を図るため浜松の文芸人の収蔵品を中心にした平常展のほか、作家、ジャンルに視点を当てた企画展を開催しています。

また、俳句、文学史、言葉など、広い文芸分野をテーマにした講座を開催し、身近に文芸を学び楽しむ場、語り合う場としての環境づくりを進めています。

課　題

近年、若者の文芸離れが深刻化しています。その課題へのアプローチの一つとして、文芸館の認知度を高め、興味を持ってもらうための活動をしています。

活動に関する具体的な方針として、『企画・展示・広報』の３つの柱を大事にしています。左の写真は、活動開始１年目に、『広報』の活動として作成したチラシ・ポスターのデザインです。写真やキャッチコピーの作成など全てを学生だけで作りました。チラシ・ポスターは今後長く使っていくことになっています。

そして活動２年目となる2018年度は『企画』と『展示』を中心に活動し、２つの企画を行いました。また今年の夏には新たな企画を予定しています。

取り組んだこと

※上から『チームで挑戦！GOGO俳句』『文字モジ探検隊』『展示』の写真です

2018年度は『企画』と『展示』を行いました。

企画は２年生と３年生（それぞれ学年は昨年度のもの）で別々に１つずつ、合計２つ行いました。対象を中高生と小学生に分け、幅広い世代の子ども達に関わってもらえるようにしました。１つは３年生主体の『チームで挑戦！GOGO俳句』、もう１つは２年生主体の『文字モジ探検隊』です。

『チームで挑戦！GOGO俳句』は、合作俳句を体験してもらうイベントです。合作俳句とは１つの句を３人で作るというものです。まずテーマを決め、１人目の人がそれに沿った上五を考えます。次の人は最初のテーマや上五とは全く関係ないような中七を考えます。３人目の人は上五と中七を受けて、句としてまとめられるような下五を考えます。一連の手順により様々な句がうまれ、それを発表しシェアしました。私たちも含めほとんどの人にとって新しい俳句との接し方であり、中高生の反応も上々でした。

『文字モジ探検隊』は、自分たちで見つけた言葉を用いて各班がオリジナルの物語を作る、というものです。まず、参加者に宝探しをしてもらいます。そのお宝にはことばが書かれたカードが複数入っています。そこで見つけたことばを班の中で持ち寄ってシェアし、我々があらかじめ作っておいた虫食いの物語に埋めていくことでオリジナルの物語が出来上がります。この企画でも、各班で出来上がった物語を発表し合いました。子ども達の楽しそうな様子と豊かな発想力が印象的でした。

展示は、これまで地域創造学環フィールドワークとして行ってきたことを一般の方に紹介し、興味を持ってもらうために行いました。左の写真にあるように、ガラスケースの中に並べました。その上に置いてある見出しがGoogle風になっていることに気づいていただけましたでしょうか？

今後取り組むべきこと

これから主に進めていくのは、『企画』になります。

今年の７月に俳句のイベントを予定していて、企画の大まかな方向性や宣伝用のチラシは完成しています。これからは企画の詳細を練り企画書を完成させることや、宣伝を行っていく予定となっています。フィールドワークに当初から関わってこられた先輩方が抜けてから初めてのイベントとなりますが、メンバー一丸となって進められるよう頑張りたいと思います。また、今年の夏に文芸館で開かれる読み聞かせイベントに参加することになりました。大人よりも子どもに近い大学生としてできることをやっていきたいと思っています。これからも若者をはじめとして多くの方に文芸や文芸館に興味を持ってもらうため、活動していきたいと思っています。

浜松市　佐久間町

商品開発で交流の環づくり

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　３年　伊神翔央汰、木下湧太、佐々木直人
（地域共生）　３年　大野美晴、薮野華奈、２年　末広皐、１年　新井七津奈
（地域環境・防災）２年　清水大暉
（スポーツプロモーション）３年　加藤楓、藤浪茉央、１年　魚住和未、籠谷遥
指導教員：○准教授　皆田潔、教授　江口昌克、教授　河合学、
准教授　山本崇記
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
浜松市天竜区佐久間協働センター
佐久間パンプキンレディース

地域概要

浜松市佐久間町は、天竜川の上流に位置する人口約3,500人の中山間地域である。最近では、三遠南信自動車道の佐久間道路が開通し、交流機会の拡大が期待される。　また、新そば祭りや佐久間ダム竜神祭りでは、住民の手によって地元の特産品が販売され、佐久間の活力を感じることができる。

佐久間町の地域づくりの担い手として「NPOがんばらまいか佐久間」が中心となり、佐久間と周辺地域、人と人とを結ぶ重要な機能を果たしている。

私たちが感じた地域の課題

① 人口の６割弱を65歳以上の高齢者が占める佐久間町は地域活動を支える担い手も高齢化傾向にあり、活動の維持や推進が心配される。
② 町外から見て、佐久間町の認知度が低く、訪れる人は多いとはいえない。また、魅力となりうる素材は確認できたものの、足を運ぶまでの理由にはならないのが現状。さらに、それら魅力をはじめとする地域情報の発信力が不足していると感じた。

今年度取り組んだことと成果

① 佐久間の女性加工グループ「パンプキンレディース」との連携を強化し、当団体が製造するお菓子の「ごまちゃん」の知名度向上に取り組んだ。これまで一種類だった「ごまちゃん」をベースに、アレンジを加えた新商品の開発、製作、販売を行った。
② 「佐久間ダム竜神祭り」などのイベントに参加し、域外からの来訪者に対して佐久間町のPRを行った。さらに、パンプキンレディースらの協力のもと、新商品の試作品販売を行った。私たちは地域のつなぎ役を目指すと共に、佐久間町の住民のみなさんとの交流を深め、私たちの活動の認知度向上を図った。
③ 藍染体験や農業体験を通じて、農山村の伝統的な生活様式の持続可能性の着眼を得た。
④ 昨年に続き、地域情報の発信力向上のため、広報誌「サクッとさくま」を発行した。

染色技法のひとつ、藍染を体験

自家菜園で採れる多様な野菜

支えてくださる皆さんと記念撮影

「ごまび」の開発と販売に関する取り組みとモニター調査の実施

- パンプキンレディースが20年以上前に考案したお菓子「ごまちゃん」を学生がアレンジし、「ごまび」（ピーナッツ味）を開発した。さらに、包装のパッケージも学生がデザインした。
- 町内で開催される「佐久間ダム竜神祭り」や「フェスタ佐久間」にて「ごまび」の試作品販売を行い、商品化の道筋をつけた。
- 県内の大学が連携して開催した「地域教育・研究フェア」（静岡駅地下広場）にて、ごまびの試食会や佐久間町の認知度調査を実施した。

ごまちゃん作りの様子

長年、佐久間で愛されるごまちゃん

学生とパンプキンレディースが協働開発したごまび

学生編集による広報誌「サクッとさくま」発行とフィールドワーク活動紹介の場の設置

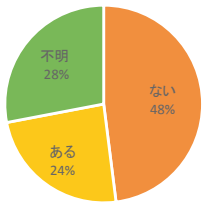
- 学生視点で佐久間町の魅力を紹介するパンフレット「さくっとさくま」の製作を佐久間協働センターの協力の下で継続し、現在第６号までを発行した。
- 「サクッとさくま」は、佐久間ダム電力館のほか、東京都千代田区の「ふるさと回帰支援センター」の静岡ブースに一部が配架された。地道な活動が結果につながり、佐久間町の皆さんから評価を受けた。
  →この反響は多くの地域住民や観光客の方の手にとってもらうことが実感でき、活動のやりがいに直結した。
- 佐久間電力館の御厚意で、電力館2階の交流スペース一角の壁面を提供いただき、フィールドワークの活動紹介ポスターやこれまで行ったワークショップで佐久間の活性化のために議論した際の資料などを掲示している。

第３号 ごまちゃん編

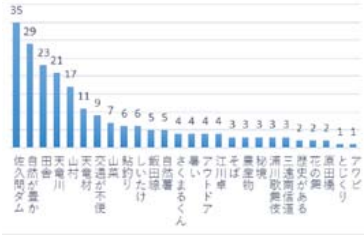
第４号 アワビの陸上養殖編

佐久間の認知度調査

実　施　日	2019年２月14日
場　　所	静岡駅北口地下広場 イベントスペース
イベント名	静岡県内大学 地域教育・研究フェア
調 査 方 法	対面調査
有効回答者数	90名



佐久間町への訪問経験



佐久間町のイメージ（複数回答）

今後取り組む内容

【商品開発】ごまちゃん・ごまび
- 商品開発の試みを地域活性化に結びつけるため、認知度調査の結果を踏まえて検討する。
- 農山村の暮らしを深掘りし、交流人口の拡大に貢献する。

【情報発信】サクッとさくまの発行
- 佐久間町の魅力を発信できるよう、今年度２度発行を目指す。
- 企画のブラッシュアップを図り、取材や編集スキルを高める。

【関係の維持強化】活動の深化
- 地域住民や団体との交流を深め、より一層、地域に密着した活動にする。

田園空間博物館　南遠州とうもんの里

子どもを呼び込むための環境づくり

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　３年　豊住太一、２年　久保山健太、１年　朝倉大翔
（地域共生）　１年　溝下紗里奈、宮地珠妃
（アート&マネジメント）２年　濱嶋ななみ、１年　星野未佳
（スポーツプロモーション）３年　海野真由、金森彩葉、小西涼奈、佐藤まどか、七海遥喜、宮川佑紀乃、２年　多治見帆香、萩原那緒
指導教員：○教授　日詰一幸、准教授　石川宏之、特任助教　川崎和也
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
NPO法人とうもんの会
蓮舟寺のみなさま

地域の概要

「とうもん」とは、掛川市・袋井市・磐田市の南部に広がる100ヘクタールもの広大な田園風景のことを表す。この地域は、江戸時代の地震にともなう海底の隆起によってできた低湿地帯で、ここに暮らす人びとの生活は、水害や干ばつ、「遠州の空っ風」など、厳しい自然との闘いの中で育まれてきた。現在の「とうもん」の風景は、こうした厳しい自然との共生を模索しながら、地元住民たちによって営まれてきた農業によって形作られている。

「とうもん」の風景全体を屋根のない博物館とみなして整備されたのが「田園空間博物館 とうもんの里」である。自然との共生の道の中で作られてきたとうもんの田園風景や歴史、伝統文化、農業、そして人々の暮らしそのものを博物館の展示物として保存する。

「南遠州とうもんの里総合案内所」は、地元の有志でつくられた「NPO法人 とうもんの会」によって運営される。農業や農村の魅力を伝える情報発信基地として、地元の農産物を直売する朝採り市や、農村の暮らしを楽しみながら体験できる農業体験・食体験、歴史観察のプログラムなどを開催し、地域住民の交流の場ともなっている。

とうもんの里フィールドワークのメンバー

わら小屋と総合案内所

「とうもんの会」

課　題

子どもが少ない
「とうもんの会」は、「とうもんの里」を拠点にして、田園風景の保存と農村の伝統文化の継承を目的に活動を行っている。特に、次世代を担う子どもたちに、農村や農業の魅力を伝える活動に力を注いでいる。しかし「とうもんの里」を訪れる子どもの数は必ずしも多いとは言えない。それには3つの要因があると考えられる。

～要因～
① **交通の便の悪さ**　→バスは１時間に１本あるかないかの運行本数。
② **情報発信の不足**　→「とうもんの里」の存在があまり知られていない。
③ **子どもたちが「とうもんの里」を訪れる目的やきっかけがない**
→　子どもたちが興味を示し、親子で自然と触れ合いながら楽しめるイベントの運営に注力していく必要がある。

とうもんの里フィールドワークのキャラクター「KeeYMoN」

平成30年度取り組んだこと

フィールドワークの目的：「子どもを呼び込むための環境づくり」

○ 自然を利用した遊具の製作
内容：竹馬や竹ボウリングなど地元にある自然の素材を利用して、子どもたちが自由に使える遊具を製作した。
成果：自然にあるものを使った昔ながらの遊具で子どもたち・大人の方々に楽しんでいただけた。

○「ふるさとの道ウォークとみかん狩り」の運営とイベント企画
内容：ウォーキングを楽しめるように、道中に自然を利用した遊具で遊べる場を設け、「ネイチャービンゴ」を作成した。また、みかん狩りの際にみかんゼリーを提供した。
成果：子どもたちが自然と楽しく触れ合う機会を提供できた。私たちが製作した遊具を子どもたちはもちろん、大人の方も「昔を思い出す」と積極的に利用してくださった。みかんゼリーはおいしいと好評だった。

○「とうもん図鑑」の実施
内容：昨年度から企画を準備していた「とうもん図鑑」を、実際に子どもたちに行うことができた。
成果：子どもたちが自然に触れ合う機会、「とうもんの里」について知ってもらう機会を提供でき、「とうもんの里」を訪れてもらうきっかけ作りに繋がった。

○ イベントのチラシ作成
内容：イベントを告知するために、大人向けと子ども向けのチラシを作成した。
成果：対象を分けることで、より詳しく広報できた。イベントの集客にも繋がった。

ネイチャービンゴ

竹でつくった水鉄砲

みかん狩り

とうもん図鑑チラシ

今後取り組むべきこと

- **イベントの効果の測定**
　昨年度は「ふるさとの道ウォークとみかん狩り」「とうもん図鑑」等を行った。しかし対象となる子どもたちが、どれほど自然に興味を持ったのか、その効果をはかることができなかった。そのため、今年度のフィールドワークでは、イベントの効果をアンケート等を通して測定したい。
- **「とうもん」全体の地域について知る**
　これまでのフィールドワークでは、「とうもんの里」やその近辺ばかりを対象に活動を行ってきた。しかし、「とうもん」と呼ばれるエリアは、その他の南遠州の地域も含むため、とうもん全体の自然、農業、文化、生活等を学生自身が体感し、理解していきたい。
- **自然と触れ合うワークショップの開催**
　子どもたちが「とうもん」の自然に興味を持つきっかけとなるように、自然を楽しむことができる企画（ワークショップ等）を行っていきたい。
- **地域の方との関係づくり**
　「とうもんの里」でイベント等の企画を行っていく上で、地域の方々との協力は必要不可欠である。「とうもんの会」の皆さんを始め、そこに農産物を運んでくる生産者の方々やそれを買いに来る消費者の方々、「とうもん」の地域に住む人々との関係づくりを行っていきたい。

御前崎市

御前崎スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　１年　齋藤あい
（地域共生）　１年　中野希音
（スポーツプロモーション）１年　遠藤千懐、小西玲衣奈、萩原琢麻、平田直也、松井小春
指導教員：○講師　村田真一、教授　水谷洋一、特任助教　川崎和也
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
御前崎市総務部企画政策課
株式会社東興
静岡カントリー浜岡コース＆ホテル

地域の概要

御前崎市は、2004年に榛原郡御前崎町と小笠郡浜岡町が合併して誕生した、遠州東部の静岡県内陸部最南端に位置する人口約３万人のまちである。太平洋側に位置するため、夏の気候は周辺地域と比べ穏やかであるが風は強い。冬は晴天が多く雪が降ることはめったにないが、「遠州のからっ風」と呼ばれる強い季節風の影響を受けるため、さらに風が強くなる。年間日照時間が国内で最も長いという特徴を生かし、農業やウィンドサーフィンなどのマリンスポーツが盛んである。

御前崎市もまた人口減少、地域経済の縮小などの課題が顕著で、スポーツによる交流人口の拡大と産業振興を目的とした『御前崎スポーツ振興プロジェクト』をはじめ、行政、市民、企業が連携して地方創生に取り組んでいる。

取り組んだこと

私たちは『御前崎スポーツ振興プロジェクト』に参画し、スポーツによる御前崎市の地域活性化に取り組んだ。また御前崎市はラグビーワールドカップ2019日本大会に出場する南アフリカ共和国とジョージアの代表チームのキャンプ地となる予定であることから、御前崎市にそのレガシーを残すための企画づくりにも取り組んだ。

御前崎市での現地調査だけでなく、学内で事前・事後学習も行い、文献資料を読んで議論を重ねて企画を考えた。現地実習の内容は以下の通りである。

【第１回 2018年10月18日】
御前崎市役所を訪問し、市役所、東興、静岡カントリー浜岡コース＆ホテルの担当者の方々と意見交換を行った。『御前崎スポーツ振興プロジェクト』の概要や予定されている事業などについての話を聞いた。また静岡カントリー浜岡コース＆ホテルにある「御前崎NEXTAフィールド」も視察し、担当者の方から説明を受けた。

【第２回 2018年11月15日】
御前崎市の集客のために活用できる資源を探すために現地調査を行った。観光協会の職員の方やみやげもの店の従業員の方々にもインタビューを行った。

【第３回 2019年２月13日】
これまでの活動をもとに、①「全国から大学生を集めるための企画」と②「ラグビーワールドカップのレガシーを残すためにできること」についての発表を御前崎市役所で行った。その後、発表会にご出席くださった御前崎市役所、東興、静岡カントリー浜岡コース＆ホテルの方々と意見交換を行い、私たちの提案に対して多くの意見やアドバイスをいただいた。

取り組みの成果

現地実習、事前・事後学習を通して、以下の企画を考えた。

（1）全国から大学生を御前崎に集めるための企画
御前崎市を観光で訪れる人の数が最も少ない２月と９月は、大学生は長期休暇中であることを踏まえて、「夏」と「冬」に大学生を御前崎市に集めるための企画を考えた。

「夏」～ウィンドサーフィン大会×UMF企画
毎年９月上旬にマリンパーク御前崎で大学のサーフィン部やサークルを対象とした全国大会を２日間にわたって開催する。大会２日目には、大会参加者に限らず誰でも参加することができる交流会として、ミュージックフェスを実施する。

「冬」～まちあるきノルディックウォーキング×キャンプin御前崎
写真コンテスト、宝探しゲームなど参加者を飽きさせない工夫を図りながら、御前崎市内の各所をノルディックウォーキングでまちあるきをする。夜には、BBQ、キャンプファイヤー、天体観測などを実施し、御前崎市の魅力ある自然を体感し、参加者同士の交流を深める。

（2）御前崎市にラグビーワールドカップのレガシーを残すための企画
ラグビー文化のレガシー
- ファンゾーンの充実
  （例）パブリックビューイングの設置
  ……マリンパーク御前崎、御前崎NEXTAフィールド、あらさわふる里公園など
- ラグビーに親しめる環境づくり
  （例）ラグビー体験教室の開催……御前崎NEXTAフィールド、浜岡砂丘など
- オブジェクトの作成・設置（有形のレガシー）→　今後、御前崎市の新たな観光スポットとする

南アフリカ共和国とジョージアとの継続的な交流のレガシー
- 南アフリカ＆ジョージアの文化を知ってもらうための機会をつくる
  （例）南アフリカ共和国とジョージアの情報を記載したチラシや冊子の作成と配布
  （例）御前崎市役所や図書館などに南アフリカ共和国とジョージアの特集コーナーの設置
- 南アフリカ＆ジョージアの代表チーム、日本在住の南アフリカ共和国とジョージア出身者との交流会の開催

今後取り組むべきこと

御前崎フィールドの１年目となる2018年度は、御前崎市を知ることに加えて、文献資料を読み、そこから企画をつくりあげる力を身につけることを中心に行った。

今後は御前崎市で開催されるイベントに運営スタッフやボランティアなどとして参加し、イベントの運営の仕方を実践的に学ぶ。そして御前崎市役所での中間発表や意見交換会でいただいたさまざまな意見や専門的な知識をもとに、私たちの企画をさらに深く検討し、その実現に向けて取り組んでいく。

松崎町　商店街

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　３年　和泉直人、遠藤有紗、影山舞、本田圭美
　　２年　長田結衣、１年　中西花、宮本彩名
（地域共生）　２年　望月南緒、１年　大谷知
（アート&マネジメント）２年　柚木真里奈
（スポーツプロモーション）３年　吉澤公史、２年　黒墨世菜
指導教員：○教授　阿部耕也、教授　杉山康司、准教授　皆田潔、
　　准教授　牛場智　　※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
松崎町企画観光課
松崎町総務課
松崎町商工会
静岡県立松崎高等学校

地域の概要

牛原山からみた松崎町

『花とロマンの里』松崎町。

春には美しい花々が咲き、まちを歩けばどこか懐かしいような、わくわくする気持ちになります。

「the most beautiful villages in japan（日本で最も美しい村連合）」の加盟地域であり、豊かな自然が溢れる地域です。また、なまこ壁のまち並みが残っていたり、国指定重要文化財の「岩科学校」があったりと、歴史を感じる地域でもあります。
そして、食べ物がとても美味しいまちでもあります。桜葉餅、桑茶、海の幸など、あげたらきりがありません。食事もフィールドワークの楽しみの１つです！

静大から車で約３時間半。その先にあるのは豊かな自然であり、美しいまち並みであり、美味しい食べ物であり、あたたかいまちの方々です。３時間半は長いのでしょうか？短いのでしょうか？そんな松崎町フィールドの活動報告です。

取り組んだこと

【2018年度の主な取り組み】

●《棚田のあかり展》
石部にある棚田で実施されている、棚田のあかり展の手伝いをさせて頂きました。
夏と冬の年２回実施されていますが、夏はロウソクに火を灯し、冬はLEDライトを使用します。私たちは、夏に参加させて頂いたため、棚田のへりに１つずつロウソクを設置し、火をつけていく作業を手伝わせて頂きました。他のボランティアの方々も含め、合計で1000個程度のロウソクを設置しました。

●《商店街店舗調査（継続中）》
商店街にある店舗への聞き取り調査を実施しました。これは、今後のフィールドワークに活用できる資料を作るため、そして、商店街調査を松崎町民ではない大学生が行うことで、大学生なりの商店街に対する提言書を作ることを目的としています。

●《松崎中学校、松崎高校の生徒との交流（継続中）》
松崎中学校、松崎高校の生徒の皆さんとワークショップを行いました。「大学生ってどんな生活をしているの？」や「理想の松崎町（商店街）について考えてみよう！」といったテーマで実施させて頂きました。

棚田のあかり展、ロウソク設置

商店街店舗調査、聞き込み

松中生、松高生とのワークショップ

発見した地域の課題

●知名度
様々な方法で情報発信はしているものの、未だ地理的な通過点になっている部分もある。

●観光
夏には多くの海水浴客で賑わうが、冬になると極端に観光客が減少してしまう。

●文化・伝統の継承
秋祭りに行われる「三番叟」をはじめとした伝統や文化の後継者の問題。誰が、どのように受け継いでいくか。

●教育
中学校、高校と町内に１校ずつしかなく、在籍する生徒も小学校の時からほとんど変わらないメンバーのため、競争心が生まれにくい環境にある。また、大学がないために、「大学」や「大学生」が身近でなく、イメージしにくい存在になっている。

今後の取り組み

【好きを咲かせる】フィールドワーク

今年度のフィールドワークにおいて、私たちは１つのテーマを掲げて活動することを決めました。
それは、**『好きを咲かせる』**です。

２年間松崎町で活動させて頂いたなかで、私たちは、「松崎町の皆さんにもっと松崎町のことを好きになってもらいたい！」と感じるようになりました。

私たちが水となり、松崎町の魅力や素材を土台（土）にして、松崎町民（タネ）に松崎町をより好きになってもらえるような活動をしていきます。

上記に示した課題のなかで、私たちは特に**「教育」**に注目しました。
大学のないまちに私たち静大生が入り、地域の中高生と協働して活動することで、何か生み出せるものや提供できるものがあるのではないかと考えています。

また、**商店街店舗調査**も継続していきます。前期中に全ての店舗に調査を実施し、私たちなりの提言書を作りたいと考えています。

【2019年度前期フィールドワーク取り組み予定】

- 第1回目　・松高生との顔合わせ＆打ち合わせ
- 第2回目　・松高文化祭への参加
- 第3回目　・商店街店舗調査

テーマイメージ

松崎町　観光と防災

防災と観光の両立

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域環境・防災）３年　太田智輝、杉山尚暉
２年　勝谷勇介
１年　平江夏樹
（アート&マネジメント）２年　中村実李
指導教員：○准教授　原田賢治、教授　岩田孝仁、教授　小山眞人
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
松崎町企画観光課
松崎町総務課
静岡県立松崎高等学校

地域概要

松崎町は伊豆半島南西部に位置する町。

松崎港から南へ連なる海岸線は、富士箱根伊豆国立公園や名勝地伊豆西南海岸に指定されており、漁港や海水浴場と断崖が入り組み、**変化に富んだ景勝地**を形づくっており、多くの魅力ある観光地となっている。

駿河湾に面するという特性から、駿河・南海トラフで発生する**巨大地震による被害が想定**されており、最大で震度６強の揺れが発生すると考えられている。

地震に伴って発生する**津波への対策が地域課題**として挙げられている。

牛原山より松崎町市街地を鳥瞰（松崎町ホームページ）

今年度取り組んだこと

昨年度の活動より、避難訓練でのアプローチが地域課題解決につながると考え、2019年３月10日に行われる避難訓練に向けて活動を行った。

●2018年５月２日～３日
・石部の棚田あかり展準備
石部は昔、海上交通などの目印として火を燃やしたり、石火と呼ばれていたりと、火に縁のある地域であった。その名残として、毎年景観地である石部棚田にキャンドルで灯りをともし、美しい景色を作り出している。

富士山と南アルプスを一望

・三世代交流イベント（砂浜運動会・グランドゴルフ）
小学生・大人の部門に分かれて各種目を行い、文字通り三世代で交流を行うイベントである。元々、砂浜運動会とグランドゴルフで分けてはいなかったが、参加人数の減少によって、現在のような形になっている。

●2018年８月31日～９月１日　●2019年２月12日～13日
・松崎高校の生徒と談話・ヒアリング
・松崎高校の学生や松崎町西区区長さんと地区の避難訓練についての話し合い

・マンネリ化し参加者の意欲が低い
・計画作成がボランティアでありながら仕事量が多い
・避難訓練が現実的ではない

●2018年11月２日～３日
・松崎町秋祭りへの参加
秋祭り期間中、松崎町は多くの観光客や帰省した方で賑わいを見せ、町の一大イベントとなっている。若者による太鼓台が町を練り歩くことで一層の盛り上がりを見せる。更に、伊那下神社・船寄神社・道部神社の三か所で日本の伝統芸能である三番叟と呼ばれる舞が奉納される。
神輿担ぎや後片付けを通して町の方とのより深い交流を図った。

神輿担いで町内歩き

太鼓台演奏

松崎町のアツい夜!!

●2019年３月９日～10日
・避難訓練準備・避難訓練
2018年前期に行った高校生、区長さんとの話し合いや、ワークショップやヒアリングを通して得られた改善点等をもとに、訓練当日に実際の災害発生に伴い通れなくなる可能性のある一部の道路を封鎖し、マンネリ化の防止を試み、町民の避難行動を観測した。

一人一人の避難時間を記録

左の画像にあるような看板を設置し、注意書きと阪神淡路大震災当時の画像を組み合わせることにより、発災時の状況をイメージしやすくした。
避難完了後に、学生側で作成した避難にかかる時間や備えておいた方がいいモノをまとめたワークシートを配布し、もしもの時への備えが定着化する事を試みた。

活動を通して発見した地域課題と今後取り組んでいきたいこと

現在、松崎町では津波被害に対する避難が課題として挙げられている中で、私たちは避難訓練という側面からのアプローチを試みた。その中で、やはり「防災」という言葉自体が受け入れられ難いという事実があるとともに、高齢化に伴う人手不足が深刻な問題である事に改めて気づかされた。地域課題としては、避難訓練への参加率があまり高くない事や、イベント等においても参加するメンバーが固定されていることなどが挙げられる。
これらの問題・課題に対し私たちは、今回の取り組みを活かした避難訓練の改善案を引き続き提示していくとともに、避難訓練以外の防災意識を促すような方法も考えていく必要があると感じた。
また、私たちの班は「観光・防災」であるが、観光面でのアプローチ等があまりできていなかったことが今回の反省点である。
今後の活動予定としては、観光面にも重点を置き、防災としての機能を兼ね備えた観光資源等の創出にも取り組んでいきたいと考えている。

東伊豆町

新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　２年　池田橘平、小山莉乃、増田彩香
　　１年　土橋もも、星野海輝也
（アート&マネジメント）２年　梅田留奈、河村清加
指導教員：〇教授　阿部耕也、准教授　皆田潔、准教授　牛塩智
※〇はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
NPO法人ローカルデザインネットワーク

地域の概要

東伊豆町・稲取は伊豆半島南東部に位置する漁村であり、観光と温泉を産業の主軸としている。魚介類や海や山の自然のほか、雛のつるし飾りを主な強みとして発展した地域である。つるし雛発祥の地として有名であり、毎年１月20日から３月31日にかけて「雛のつるし飾りまつり」が開催される。今年新たに雛フェスの開催を行うなど、町をあげたイベントによって盛り上がりを見せる。
急峻な地形で多くが山林で占められているため、住宅地は海岸付近に集中し、稲取地区が最も人口が多い。
受け入れ先であるNPO法人ローカルデザインネットワーク（LDN）は東伊豆町に拠点を置き東京と東伊豆、社会と学生を繋げる活動を行なっている。その活動場所であるダイロクキッチンは、食をテーマにし地域の交流の場となっている。

写真１：みかん畑からのぞく稲取

取り組んだこと

今年初開催である「雛フェス」への出店が決まっていたため、前年度は主に雛フェス開催に向けた活動に取り組んだ。
「雛フェス」とは、東伊豆町商工会が主催するイベントで、３月２日・３日に開催された。空き店舗を活用し活性化を図るものである。
静大フィールドワークチームは、ライブペイント・ハーバリウム製作体験の二つの企画・出店を行なった。

〇ハーバリウム出店
ひな祭りということで、若い女性をターゲットとし、コンセプトは「稲取を小瓶に詰めて持ち帰ってもらう」とした。

・７月７日に空き店舗を活用してプレワークショップを地元の方達に向けて開催。
〇稲取でハーバリウム作りという体験が新鮮に感じられ、参加者からは好評。
×稲取とハーバリウムの接点がなかったため、「稲取を詰め込んだハーバリウム」を具体的にする必要があった。
↓
・ミーティングを重ね、稲取要素を検討。
東伊豆町花であるイソブキ、つるし飾りにも使われる着物の端切を入れることで、「稲取らしさ」を出した。また、つるし飾りをモチーフとした飾りも作り関連づけた。
↓
・イベント当日には多くの女性が訪れ、製作を楽しんでいる様子であった。また、予定数を完売することができた。

写真２：7月ワークショップ風景

写真３：雛フェス当日の様子

写真４：稲取を詰め込んだハーバリウム

〇ライブペイント
ライブペイントは雛フェスのビッグイベントの一環で行い、
コンセプトは「東伊豆町のひとと観光客とを巻き込んでひとつの形に残す」とした。

・地元小学生の力を借り今回のライブペイントの下書きをするワークショップを行った。
↓
・地元の稲取小学校と熱川小学校に訪問させていただき、先行でタイルの色ぬりを生徒さんたちと行った。
↓
・地元の方と観光客の方を含め大勢の人に参加していただいて完成した。
今回の企画では画材の準備から下準備、当日の完成まで東伊豆の方や周りの方々の協力がなければ完成することはなかった。

ライブペイントのパネルは今年１年間東伊豆町役場で展示する。

写真５：小学校へ訪問

写真６：雛フェス当日の様子

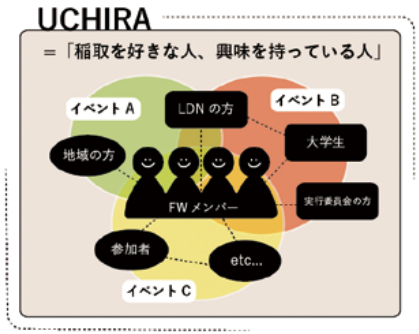
写真７：ライブペイント完成版

発見した地域の課題

〇地域の魅力を知ってもらう
東伊豆町には美しい景色、自然、地域の人々、雛人形、海鮮などの様々な魅力あるコンテンツが存在する。だが、それらを発信する力が弱い。それを発信する機会、方法などを見出すという課題がある。

〇街の寂しさ
新入生が初めて参加したフィールドワークで町歩きを行い、東伊豆町の人通りの少なさや、シャッターを下ろしている店舗の多さが目立った。

今後取り組むべきこと



〇目標
人が行きかう稲取を実現する。

→「UCHIRA」を増やすこと
UCHIRAとは…稲取を好きな人、稲取に興味を持っている人、私たちの仲間のこと。

→わたしたちの役割はコンテンツを生み出すことによって人と稲取をつなぐこと
今年取り組んだ雛フェスでも私たちは「人と稲取をつなげる」ことを意識して、ハーバリウム出店とライブペイントに取り組んだ。今後もモノとシカケで人と稲取をつなげていきたいと考える。

伊豆半島ジオパーク（保全と防災）

伊豆半島ジオパークにおける環境保全と防災対策

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域環境・防災）３年　勝又壮平
２年　上田啓瑚
１年　福山めぐみ
指導教員：〇教授　小山眞人、特任准教授　山本隆太
※〇はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
伊豆半島ジオパーク推進協議会
伊豆半島ジオガイド協会
西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会

地域概要

「見慣れた地形・風景には、すべて意味がある」―伊豆半島ジオパークは、伊豆半島の自然とそこに育まれた地域社会のつながりを可視化する場である。ジオパークでは、住民が地域の成り立ちや価値をより深く理解し、それらを観光や教育などに活かすことによって地域社会の持続的発展に役立てることができる。また、過去たびたび自然災害の被災地となってきた伊豆半島においては、地域の防災への貢献もジオパークの重要な課題のひとつである。

本フィールドワークは平成29年10月からスタートし、ジオサイト（ジオパークが定めた主要見学サイト）の価値・現状の理解ならびに、その環境モニタリング方策としてのセンサー開発の検討・実践を行ってきた。平成30年度後半からは西伊豆町における津波防災の現状や課題について学び、防災情報の共有システムの実現についても取り組んでいる。

ジオサイト「旭滝」の様子

課　題

（1）ジオサイトの定量的環境負荷測定

ジオパークでは、見どころとなるジオサイトを指定した上で、それらを保全し、かつ安全に見学するための環境整備を行っている。こうしたジオサイトの保全・整備作業を策定・維持するためには、まずそれらの環境負荷を定常的・定量的にモニタリングする必要がある。しかし、ジオサイトの数は多く、電源のない山奥に位置する場合も多い。そのため、訪れる人や動物の往来を定量的に計測する方法は確立できていない。

橋の欄干に設置した環境負荷センサーの調整作業

（2）地域の防災情報の共有と更新

伊豆半島西岸の西伊豆地域では、これまで西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会が、伊豆半島ジオパーク推進協議会と連携して防災まち歩きを開催してきた。しかし、そこで得られた避難の妨げとなる危険個所等の防災情報は、地域住民に十分共有されていない状況にある。また、こうした防災情報は時々刻々と変化するため、素早く容易に情報の修正・更新を可能とするシステムが必要である。

西伊豆町の避難訓練（平成30年９月）の様子

今年度取り組んだことと成果

（1）環境負荷センサーの開発

環境負荷センサーの開発には「Arduino」を用いた。「Arduino」は、多種かつ安価な電子基板モジュールを組み合わせ、それらをマイクロコンピュータで制御することで目的の装置を自作可能としたシステムである。超音波距離センサーと組み合わせることによって、センサー前を通過する物体との距離が一定値以下となった回数をカウントし記録するシステムを開発した。さらに、外部電源が確保できない場所への設置も想定し、太陽光パネルとバッテリーを用いたセンサーの長時間駆動にも取り組んだ。このシステムの実証実験を現場で繰り返し、安定的にセンサーが作動するように各種の調整を行った。

開発した環境負荷センサーの制御ユニット

（2）防災情報共有ウェブサイトの作成

防災科学技術研究所が開発・公開しているWebプラットフォーム「地域防災Web」上に、西伊豆災害ボランティアコーディネーター連絡会により集められた危険個所等の情報を入力し、いつどこでも容易に参照・更新できる西伊豆地域の防災情報共有サイトを作成した。その後も情報を付加・更新中である。

URL：https://chiiki-bosai.jp/hp/nishiizu

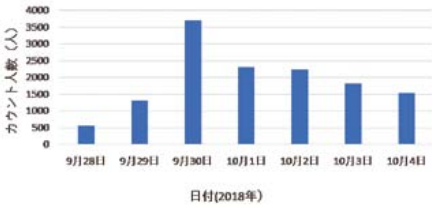
防災情報共有サイトのQRコード

作成した防災情報共有サイトのトップページ

今後取り組むべきこと

環境負荷センサーについては、太陽光が十分得られる場所でも、現行の太陽光パネル(21ｗ)とバッテリー(5000mAh)の組み合わせでは10日間程度の動作が限度のため、さらに長期間の連続記録のためにはパネルやバッテリーの大型化が必要である。また、同時に複数の動体が通過する場合は正確なカウントが困難なため、別角度からの複数センサー設置が必要と考える。さらに、人間と動物を区別可能とするためには、センサーを赤外光カメラとした画像解析システムを開発する必要がある。

防災情報共有サイトに関しては、現時点では防災情報の種類・数ともに十分でない上、それを使いこなせる住民もわずかである。今後は防災情報の量や中身を充実させるとともに、Webサイトの存在と使用方法を多くの地域住民に知ってもらい、地域住民みずからが情報を修正・更新し、かつそれらを防災訓練等に活用可能とするための、広報と教育が必要である。



環境負荷センサーがカウントしたデータの例

伊豆半島ジオパーク（教育）

伊豆半島ジオパークの持続可能な開発と教育（SDGs／ESD）の推進

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　２年　中山理紗
（地域共生）　２年　矢ケ部五朗
（アート&マネジメント）２年　森本和花
（スポーツプロモーション）２年　内村仁志、岡部由佳、西郷慶亮、鈴木麻央
１年　神谷拓実
指導教員：〇教授　小山眞人、特任准教授　山本隆太
※〇はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
伊豆半島ジオパーク推進協議会
伊豆半島ジオガイド協会

地域概要

伊豆半島は100万年前の本州と数百km南にあったフィリピン海プレートの海底火山群の衝突によってできた。今でもプレートは動き続けており、地殻変動により様々な地形を作っている。その特異的な地形「ジオ」を始め、その上に育まれる「エコ」、その自然の中で生まれた文化や産業である「ひと」が認められ伊豆半島ジオパーク（※１）は2018年４月にユネスコ世界ジオパークに認定された。

私たちは伊豆半島ジオパークの周知とジオパーク内の資源を活かした地域振興を進めつつ、伊豆半島ジオパークのSDGs（※２）達成のための活動を行っている。

伊豆半島ジオパーク
IZU PENINSULA GEOPARK

※１：ジオパーク…ジオパークとは、「地球・大地（ジオ：Geo）」と「公園（パーク：Park）」とを組み合わせた言葉で、「大地の公園」を意味し、地球（ジオ）を学び、丸ごと楽しむことができる場所をいいます。（日本ジオパークネットワークホームページより引用）
※２：SDGs…2015年の国連で決められた持続可能な開発目標のことで、17の目標を2030年までに達成しようとしている。ジオパークは自然の保護や活用をしていくことでSDGsを達成しようとしている。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です

ワークショップの様子

私たちは伊豆半島ジオパークで活動しつつ、グループ結成から毎年大学SDGs ACTION! AWARDSに参加している。同じ大学生のSDGsの取り組みを知るだけでなく、プレゼンテーションの仕方やファシリテーションの仕方なども学んでいる。フィールドワークで学んだことをフィールドワーク内だけでなくフィールドワーク外で活かしていけるように一同取り組んでいる。

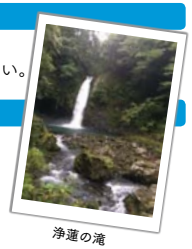
課　題

1. 地域住民との連携
- 伊豆半島内に住む地元住民でも伊豆半島ジオパークの取り組みについて知らない人が多くいる。
- 伊豆半島ジオパーク周知のための取り組みは個別にあるもののそれらの連携、継続が不十分である。

2. 地域格差
- ジオリアがある伊豆市や周辺にはジオパークの看板があり、ビジターセンターのスペースが広い。
- ジオサイトでもジオパークの説明をする看板がなかったり、道路が舗装されていなかったりしている場所もある。

3. 教育教材について
- ジオパークに関する出版物は出ているものの、専門性が高いものが多い。
- 西豆学（さいずがく）は実施されているもののジオパークと地元をつなげる教育がまだ少ない。

4. ジオ要素が強く、切り口が少ない
- 日本唯一の特殊な成り立ちからジオの要素に注目されがち。
- ジオの要素以外からどのようにして伊豆半島ジオパークの取り組みを知ってもらうか。


浄蓮の滝

取り組みと成果

〈初めの構想〉
ジオ以外の切り口から伊豆半島ジオパークの取り組みについて知ってもらうために、人々にとって身近な食に注目した。伊豆半島ジオパーク独特の環境で育まれた特産品を用いて、伊豆食から伊豆半島ジオパークの取り組みを知ってもらおうと考えた。

〈SDGs肉まん開発〉
伊豆半島の特産品であるわさびや鹿肉を用いた肉まんを開発し、消費者教育を通じてSDGsから伊豆半島ジオパークの取り組みを知ってもらおうと考えた。しかし我々の力のみで食品開発を行うのは困難、特産品のみで作るのは難しい等の理由から頓挫。

〈沼商×バンデロール×静大生によるジオパン開発・販売支援〉
自分たちのみで食品開発をすることの難しさを知り、沼津商業高校と株式会社バンデロールのコラボパン、ジオパンの開発・販売に協力させて頂き、食を通じたジオパークの周知を試みる。

〈郷土料理による教育を目指す〉
伊豆半島の郷土料理に着目し、郷土料理を使った授業を通して、伊豆半島の地元中高生に地元の魅力を知ってもらうとともに、伊豆半島ジオパークの取り組みを周知してもらうことを目指す。

〈その先へ〉
私たちは伊豆半島ジオパークで活動しているわけだがそこに住んでいるわけではない。そこに住む人達に今一度地元の魅力に気づいてもらい火山噴火や地震といった地震災害と隣り合わせである伊豆半島に暮らす人々に対し、防災教育もしていく。

今後取り組むべきこと

沼商×バンデロール開発“ジオパン・ジオメロンパン”の継続的な展開を図る
- “食”という観点から学校教育でジオパークを取り入れやすくしようとする取り組み。伊豆半島の郷土料理を教材として扱う教育プログラムを考える。
- 現状把握の調査が未だ不十分である。対象地域、人などをより明確に定め今後も調査を行っていく必要がある。

郷土料理による教育と調査活動の継続
- “食”という観点から学校教育でジオパークを取り入れやすくしようとする取り組み。伊豆半島の郷土料理を教材として扱う教育プログラムを考える。
- 現状把握の調査が未だ不十分である。対象地域、人などをより明確に定め今後も調査を行っていく必要がある。

県営団地

県営住宅団地における居場所づくりと地域福祉資源のネットワーキング

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域共生）　　１年　大塚紗菜、竹村定朋、丹羽唯人
（地域環境・防災）２年　遠藤爽、河村拓斗、櫻木哲朗
（アート&マネジメント）２年　浦田紗季
指導教員：〇准教授 山本崇記、准教授　祝原豊、准教授　須藤智
※〇はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
社会福祉法人静岡県社会福祉協議会
社会福祉法人静岡市社会福祉協議会
吉川団地自治会

地域の概要

県営団地とは、県が運営を行い、住宅を計画的、集合的に建てた住まいのことである。県営団地を含む公営団地では、収入や年齢などによる入居制限がある。現在では、単身入居をする高齢者が増加傾向にある県営団地が数多く存在する。今日の問題として、高齢者の一人暮らしによる孤独死などがある。

現在活動中の清水区の吉川団地は静岡大学から車で約30分。吉川団地もまた高齢化が進んでいる県営団地である。地域行事が少ないことや若者が少ないことなどが、現在の吉川団地の実態である。

取り組んだこと

①住民開催行事への参加

■でん伝体操

でん伝体操とは、静岡市が作った高齢者向けの介護予防体操である。団地の方々と共に体操を行うことにより、少しずつではあるが、私たちの存在を認識してもらえるようになっていったと感じた。また、健康に対する意識の高さもわかった。

■おりがみの会

普段は５～６人程度が参加しており、でん伝体操の参加者の中から参加を募っている。折り紙をおるだけではなく、世間話をするなど住民が交流することができる環境だと感じた。

■お花の会

お花の会は、団地の花壇や空き地に花を植える事で、団地を明るくすることを目的としている。普段、お見かけしない男性陣も参加していることからも、男女問わず楽しむことができる行事であった。

■地域アセスメント

地域アセスメントとは、地域内外の方々と話し合いながら、地域の特性や社会資源、地域のニーズなどを把握、分析する先進的な取組である。実際に地域の人の話を聞くことにより、より詳しい地域の現状を聞くことができた。

②学生企画イベントの実施

■非常食試食会

非常食の存在とその美味しさ、ローリングストック法について知ってもらうためのイベント。イベントを通して交流の場づくりも目的の一つとした。
男性も参加があったことからも、男性の「居場所」活動としての課題に対して大きな前進があった。

＊４月末に映画鑑賞会実施

発見した地域の課題

■男性の行事参加率

参加を促すようにはしているが参加者はほとんど女性であり、男性の参加率が低い。また、行事だけでなく外出をしない男性が多い。

■防災

住民の高齢化による防災訓練参加人数の減少。（毎年12月開催）
団地の備蓄品を住民が把握できていない。各家庭でも備蓄していない様子である。

■交通

車があれば便利だが、団地周辺の道は狭く視界が良くない場所が多い。団地から最寄りのバス停や駅までは距離があり、外出しづらい環境にある。（＝部屋に引きこもりがちになってしまう）

■自治会館の利用

自治会館は行事の開催や集会、会議等に使われているが、これら以外での利用はない。住民が気軽に立ち寄り、集まれるような場所として利用できる場とは遠い状況にある。

■住民の高齢化

現在新規の入居者は募集していない為、子育て世代などが入らず住民の高齢化が進んでいる。団地内の活動だけでなく普段の生活の中でも高齢者にとっては困難なこともあり住民同士の助け合いが必要不可欠の状況にある。

今後取り組むこと

短期

① イベントの実施・参加
→既存の行事に継続して参加するとともに、学生主体のイベントを企画し実施する。（食・防災等）

② 住民と交流する
→イベントを通して住民との交流を深め地域に賑いを生み出す。

③ 居場所づくり
→①②を通じて住民が気軽に立ち寄り集まることのできる環境（自治会館）をつくる。

長期

④ 住民主体
→住民主体での地域づくりに繋がるような仕組を創出する。

学内地域連携拠点

静大発　地域と大学の連携を広めよう！

メンバー　※学生の学年及び教員の職位は平成30年度のもの
（地域経営）　　１年　伊澤功多、鈴木沙雪、古田萌黄
（アート&マネジメント）１年　坂口律子
指導教員：○准教授　皆田潔、特任教授　岸本道明
※○はフィールド責任教員

フィールドワーク実施協力者
静岡大学学務部教育連携室

地域概要

私たちのフィールドワーク（以下、FW）は、静岡大学学務部教育連携室をFW先としている。2018年度より活動を開始し、静岡大学学務部教育連携室を中心として取り組む「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）」の展開を目的として活動している。活動の柱は主に３つある。

１つ目に、「静岡全域の大学生の県内就職促進」である。静岡県は人口流出ワースト２位、そして就職を機に若者の多くは静岡県外に転出している現状がありこの打破に取り組んでいく。

２つ目に、「地域創造学環の広報活動」である。COC＋事業の一環として立ち上げられた地域創造学環（以下、学環）のFWにおける取り組みを主として外部に発信していく。

３つ目に、「地域と大学の接点となる存在をめざす」である。学生自身が自発的に地域貢献活動をしたいと思っても、その窓口となる場所がない。また、大学側は地域からの依頼があっても学生につなぐ手段がない。そこで、私たちが窓口となるべく、その手法を模索して行く。

今後、地域と大学をいかにして結びつけるかについてを考えて活動を発展させて行こうと考える。

写真：学内連携拠点FWに取り組むメンバー

取り組んだこと

① 大正大学 地域創生学部との交流（地域創造学環の広報活動に向けて）

最近地域に着目した学部が増えている。その中で他大学にはない静岡大学 地域創造学環の魅力と地域創学環の課題を発見することができた。この交流は長期のFWを静岡県内で行なっていた地域創生学部の学生たちに対するインタビュー、東京にある大正大学への訪問の２回にわたる。

【静岡市産学交流センター in新静岡】

40日間のFWを行う大正大学 地域創生学部の１年生８人 を対象にインタビューを行なった。聞けば聞くほどFWの方法、考え方、挑み方が地域創造学環とは違っていた。地域について学ぶという同じ目的を持った学部同士ではあるが、学び方はそれぞれの大学で違うということがわかった。私たちはこのインタビューから大正大学 地域創生学部の取り組みに、より興味を持った。

【大正大学 in東京】

地域創生学部に対する興味が深まった私たちは実際に大正大学を訪問した。校内の設備、長期FW、学び方、目指すところ、フィールドワーク先、成り立ち、アンテナショップの運営について、などを知ることができた。

後日、わかったことを地域創造学環と比較し、二つの良い点、悪い点について意見を出し合った。

	大正大学 地域創生学部	静岡大学 地域創造学環
FWの期間	１年次：大学から指定されたFW先で40日間のFW実習 ２年次：大学の運営するアンテナショップで経営を実践 ３年次：学生自身で設定した研究課題を希望するFW先で行う	２年半（月に１回程度）
学び方	大学がフィールドとミッションを指定	自由に自分が学びたいことに合わせてカリキュラムを組むことができる
目指すところ	地域運営を担うリーダーを育成し、出身地に戻す	静岡県内における活躍を期待
フィールド先	全国に13箇所	静岡県内に14箇所
成り立ち	仏教系の大学の性質として （将来、各地の寺社を担う学生が集まる性質の大学の使命）	COC＋事業における若者流出の防止策の核として

大正大学訪問レポ !!

2019年１月12日・13日と私たちは実際に東京に行ってきました。
その際の活動内容を簡単にまとめてみました～！
「地域創生学部」ってなに？を求めていざ東京都豊島区にある大正大学へ！

① 東京に到着 !!

大正大学のある巣鴨に到着 !! 巣鴨商店街を通って大学へちょっとだけ商店街を観光気分で堪能しました。

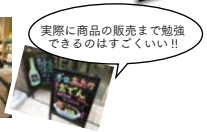
② 大正大学見学

大正大学に到着！地域創生学部の学生さんともここで顔合わせ。
大正大学が地域の子供に向けて行なっている「としま子供寺子屋」という地域貢献の取り組みも見学させてもらいました。

③ 地域創生学部の学生・職員と交流

地域創生学部の学び舎に行くまでの道のりを案内してもらいました。また、地域創生学部の学生・職員との交流では、どんな学生を育てたいかなどの教育像まで詳しくお聞きすることができました。

④ アンテナショップ「座・ガモール」へ



アンテナショップはなんと学生が仕入れ等の商品管理や勤務管理するなど・・
学生中心に運営されていました。東北エリア・京都・全国の商品を取り扱う３店舗展開で、実際に訪問している FW 先から商品を仕入れているそうです。

② 地域創造学環のFWに同行（第１回は松崎フィールド）

地域創造学環を広報するにあたり、各フィールドがどのようなことに取り組んでいるのか知る必要がある。地域創造学環のFWとはどのようなものなのか13箇所のフィールドを全てをのぞき見し、第三者の視点でそのFWに関わる。そして各フィールドのFWの様子をニュースレターにまとめ、地域創造学環の活動として外部に発信する。第１回として、松崎フィールドにお邪魔させていただき、FWの様子を観察、同行させていただいた。

地域創造学環FWをノゾキミ

伊豆半島南西部の海岸沿いに位置する「松崎町」をFWとする学生たち。松崎町の商店街活性化や松崎町の防災のあり方を考えている。地域の人との信頼関係を作るため、地域のお祭りに参加し、地域の方との交流を深めている様子を写真に収めている。

写真：松崎町の秋祭りの準備や神輿担ぎに参加する学生

今後取り組むべきこと

県内企業への訪問

冒頭にも述べた通り、県内就職率の向上を目指して活動している。そのため、静岡県内の企業の魅力を私たち自身が理解し、発信して行く必要があると考える。実際に、複数の企業さんを訪問し、学生目線から見た魅力を伝える媒体を作り、発信していきたい。

地域創造学環FWの魅力発信

COC＋事業の１つの柱である地域創造学環の情報発信を私たちがしていくためには、学環の魅力を私たちが一番理解していなければならない。そこで、今回松崎町FWを訪問させていただいたが、他FWにも順次、訪問させていただく予定をしている。最終的には、学環のホームページやオープンキャンパスなどのイベントの運営に私たちが携わりたいという想いが強いため、ここで理解した魅力を存分に発信していきたい。

大正大学との交流で得たことを静岡大学にフィードバック

大正大学地域創生学部との交流を経て、地域創造学環の良いところや反対に改善できるところが見えてきた。私立と国立の差もあるとは思うが、大正大学から学べる点は多かった。例えば、大正大学の運営するセレクトショップで学生たちが自らのFW先の商品を販売している。店舗を構えることは難しいが、自分たちが関わった先の品物を売ることは良い経験になると考える。そこで、文化祭などで学環の販売ブースを設ければいいのではないかなど考えている。このように見習える点を学環にあった形でこれから提案していきたい。

２年半の活動を終えた2018年度３年生に聞きました！

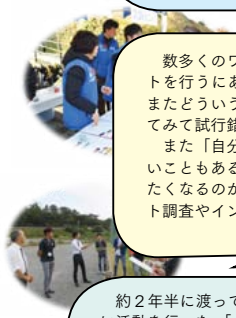
地域とのかかわりや実践を通じて得た学び、自らが成長できたこと

「地域創造学環フィールドワーク」では、学生は、１年次後期から３年次後期までの間、原則同じフィールドに継続的に関わり活動をします。このたび２年半の活動を終えた初年度入学生である2018年度３年生に、活動を終えて「地域とのかかわりや実践を通じて得た学び」「自らが成長できたこと」について聞きました。

私がこの活動で学んだことは物事を多角的に見ることの大切さだ。当初フィールドワークが始まった際は、とにかく若者を呼べばいいと思っていた。“地域活性化”のために外部の人、特に活気がある若者が来るようになればと、そればかり考えていた。しかし今振り返ってみると、それは浅間通り商店街をただの“商店街”としてしか捉えられていなかったと感じる。“地域活性化”についても漠然とした概念でしか考えていなかった。「地域活性化には若者の力を」というありふれた考えに乗っかっていただけだった。正解のない活動であるのだから「これだからこれ」というような決めつけは時に非常に危うい物になり得る。だからこそ一つの物事に対して様々な視点から見ることが大切なのだと思った。

また相手に対し本気でぶつかることの大切さもこの活動を通じて学んだことだ。確かに笑顔を送れば笑顔が返ってくるし、涙を送れば涙が返ってくる。相手に本気で向き合って欲しいならば、まずは自分が相手に対し本気で向き合わないといけないのだと思った。そしてこのフィールドワークという活動は私たちにとっては授業の一環だが、商店街の方々からしてみれば自分たちの生活に関わってくることである。商店街の方々は本気だろう。それならば私たちもそれと同じくらいの思いを持って、フィールドワークに向き合わなければならないと考えている。

（浅間通り商店街フィールド　佐藤恵美）



数多くのワークショップへの参加、実際のイベント企画運営はかなり実践的であった。イベントを行うにあたってどんなことを準備していかなければならないのか(広報、予算、物資など)、またどういう風に運営、進行していくべきなのかということが教えていただくというよりもやってみて試行錯誤しながら学んでいくことができた。

また「自分たちがやりたいこと」を行うというのも学生独自の視点から考えることが出来てよいこともあるが、「実際に住んでいる地域の方が何を必要としているのか、何をすればヒロバに来たくなるのか」というような地域目線に立った考え方やその探り方も学ぶことができ、アンケート調査やインタビューなどの行い方やコミュニケーションスキルが向上したと感じている。

（東静岡フィールド　鈴木夏帆）

約２年半に渡って「とうもんの里」というフィールドに飛び込み、「子どもを呼び込むための環境づくり」をテーマに活動を行った。「とうもん図鑑」は、学生企画であり単発型ではないイベントである。子どもたちにとうもんの自然や生き物に関するクイズをミッション形式で課し、それで得られるポイントを集めることで対価が得られるものである。子どもたちが遊び場として継続的に「とうもんの里」にやってくること、子どもたちの自然や生き物への興味関心を促すことが期待される画期的な企画である。綿密な計画・修正、デモンストレーションを経て、なんとかプレ実施までたどり着くことができた。

フィールドワークを通じての学びの１つ目は、意見・情報・状況を共有し連携することの重要性である。フィールドワークでは自分たちが主体となって企画・運営をし、グループに分かれて作業をすることが多かったが、グループ間の連携がとれていない、他のグループが何をしているのか把握していない状況が発生した。

２つ目は「若者」「よそ者」の秘める可能性である。フィールドワークで地域の方々と直に接する機会が多かったが、よく耳にしたのが「若い人が居るだけで元気が出る」という言葉である。「とうもん図鑑」は「若者」「よそ者」ならではの発想から生まれた企画であり、名倉さんや天野さんも絶賛された。自分が思う以上に「若者」「よそ者」の秘める可能性は大きいと感じた。

最後は地域の方々と関係を築くことの大切さである。地域の方々からすると、よそ者がいきなり地域に入ってきて勝手にこうした方がいい、ああした方がいいと言っても良い気分はしないだろう。よそ者にしても住民のニーズを把握できないのではないかと思う。お互いを知って関係性を築き、意見や考えを共有して方向性を統一して、本当の意味での協働をすることが重要だと感じた。当たり前のことだと思うが、意外と意識できていないかもしれない。

（南遠州とうもんの里フィールド　豊住太一）

よそ者として活動していくことの難しさを感じた。自分たちはあくまでよそ者として活動し、地域住民が主体となって行動するためのサポートをするという考え方をフィールドワークを通じて初めて知った。自分たちが継続的に支えていくことはメディアで報道される派手な地域活性化のイメージとは異なっていたが、とても大切だと思った。

（焼津市浜通りフィールド　大橋彩香）

ワークショップでファシリテーターを務めたことや、アンケート調査の報告、FW報告会などで発言する機会が多くあり、自分の意見をプレゼン力、コミュニケーション能力などを向上させることができた。それらは学年を超えたグループで活動したことや、大学外の様々な年代・経歴の方々と共に活動してきたことも関係していると思った。

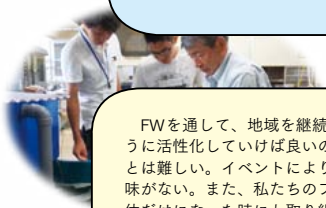
（焼津市浜通りフィールド　袴田朋伽）

一つの課題に対して多角的な視点をもち、アプローチ方法を考える能力がついた。複数のコースの学生と協働し、視点を浜通りから焼津市全体へシフトしたことが大きな要因であると考える。多角的視点が身につくことで多くの情報を基にした考察ができるようになり、大学入学時よりも内容のある意見や考えが述べられるようになった。

（焼津市浜通りフィールド　宮澤大己）

都会では、近所の人の顔を知らない・会話をしたことがないなど人との繋がりの希薄さが問題になっている。そのような時代の中で、佐久間は人との繋がりが濃く、その繋がりの中で暮らしを共に楽しみ、give＆takeの関係で食やモノを共有する。私達のFWでの活動も、人の繋がりで新たな出会いがあり、そのおかげで新たな事に挑戦してきた。だから、改めて「人との繋がりの大切さ」を学べた２年間でした。私は、このFWで最初は先生が地域の方と話しているのを見て、先生つてに会話をすることが多かった。しかし、積極的に行動することが大事だと気づき、自らパンプキンさんの輪に入って会話をすることで地域の方とその分だけ心を開いてくれた気がした。この経験から自分で行動すればするだけ、人は応えてくれるし道は開かれるということを学んだ。FWを通して、多くの失敗や間違いがあったがそれを許容してくれるサポートがあったからこそ失敗や間違いをそのままにせず、次に生かせた。この経験を生かして、さらに自己研鑽していきたい。

（佐久間フィールド　加藤楓）



FWを通して、地域を継続して活性化することの大変さを感じた。衰退している地域に入り込み、どのように活性化していけば良いのか考えるのだが、単発的にイベントを行うなどはできてもそれを継続させることは難しい。イベントによりその時は人が増えたとしても、その後また前と同じようになってしまっては意味がない。また、私たちのフィールドの場合、行政が一つの地域に関われるのは二年間のため、その後自治体だけになった時にも取り組めるイベントを実施する必要があった。イベントを開くことでその時だけ人が集まれば良いということではなく、どのようにしたらイベント後もその地に再び訪れてくれるのかまで考えることが必要であった。

二年半の活動の中で二つの商店街を見てきたのだが、シャッターが多く活気のないことが共通していた。商店街の店主さんに聞き取り調査を行うと「活気を取り戻したい。」と言う人と「このままで良い。」と言う人がおり、商店街の中でも足並みを揃えることは難しかった。多くの人がいるため様々な意見が存在し、どこに重点を置くべきなのか、何をすべきなのか見極めることが困難で、今でもあまりよくわからない。しかしながら、活性化したい、賑わいを創出したいと思っている人がいるうちは、その人達と少しずつ小さなことから取り組んでいき、後にその輪が全体に広がって行けば良いのだと考えるようになった。最初から全ての人が同じ足並みで取り組んでいくことは難しいため、最終的にその地域づくりの輪が広がっていけば良いのだと学んだ。

外国人旅行客への対応の仕方については、外国人と一括りにいっても国によって言語や文化は大きく異なり、対応の仕方も様々である。中国からの観光客は買い物がメインであまり観光はしない。それに対し、ヨーロッパの観光客は日本の文化に興味があるため観光がメインとなる。それぞれにあったおもてなしを提供するために通訳や外国語表記をもっと増やす必要がある。外国人旅行客に応じた対策やイベントなどが前々から準備されている状態で外国人旅行客を呼び込むことが重要である。

（清水港周辺地域フィールド　岩崎彩音）

2018年度　静岡大学　地域創造学環　フィールドワーク報告会

日時　2019年５月30日（木）10：15～15：30
場所　しずぎんホールユーフォニア

【舞台スタッフ】
　地域共生コース　２年　岡本　敦、竹村　定朔

【司会進行】
　地域経営コース　２年　星野　海輝也、地域共生コース　２年　齋藤　紫苑
　アート＆マネジメントコース　２年　岸山　莉子、スポーツプロモーションコース　２年　萩原　琢麻

【報告会リーフレット、報告書表紙デザイン】
　アート＆マネジメントコース　３年　柚木　真里奈

※学年は開催時（2019年度）

2018年度　静岡大学　地域創造学環　フィールドワーク報告書

2019年5月30日発行

編集発行　静岡大学　教育連携室　地域創造学環係